

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 68 2023年12月

自治体・中小企業支援	地域企業への経営支援活動……………	2
	滋賀県よろず支援拠点で企業海外進出をサポート……………	3
教 育	リスクリングする人たちと共に研鑽する……………	4
	幼稚園児向け国際理解教室……………	5
	ABICと共に歩んだ9年半……………	6
	高校生国際交流の集い2023……………	7
留学生支援	囲碁を楽しもう……………	8
	東京国際交流館での活動……………	9
	兵庫国際交流会館での活動……………	10
日本語教育	紙芝居による日本語教育 ―世界に誇れるKamishibai―……………	11
	新入会員のお知らせ……………	12
	会員の種類……………	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数……………	12
	賛助会員入会のお願い……………	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

www.abic.or.jp

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1
霞が関コモンゲート西館20階
Tel : 03-6268-8604 Fax : 03-6268-8652
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

地域企業への経営支援活動

かみ や つかさ
紙屋 司 (元 日本電気)

私は情報通信の企業で営業や関連会社の経営に携わり、定年退職後、自宅のある仙台に帰還したが、30年も離れていると地域社会とのつながりが希薄になっていた。つたない経験だが、地域社会へ何か貢献したいと考えていた時、会社の先輩からABICを紹介され2020年1月に入会した。

2022年5月に青森県六ヶ所村にある株式会社ジェイテックという会社を紹介していただき、7月末から勤務することになった。ジェイテックは使用済原子燃料の再処理を行う日本原燃株式会社の子会社で再処理工場の施設や設備の保守点検や運転を行っている。原子力発電では、一度使ったウラン燃料（使用済核燃料）を再処理することで再利用可能なウランやプルトニウムを取り出すことができ、繰り返し原発の燃料としてリサイクルが可能になる。ウラン資源の有効利用になり、エネルギーの長期安定供給にもつなげることができる。原発の稼働については東日本大震災以降、賛否両論はあるが、現実問題として存在する使用済核燃料の扱いは避けては通れず、海外に依存している再処理を国内で行うため、ジェイテックはその施設や設備の安全確保や安定稼働を維持する大変重要な事業を行っている。

私は建設業の経営管理業務責任者の資格を持っていたので声が掛かったのだが、ジェイテックは長年培ってきた高い品質の保守点検業務を可能にする技術を持ち、それらを一般企業にも提供したいと考えており、その営業推進も支援することになった。私は情報通信業界の経験しかなく、設備メンテの建設業界は門外漢だが、いわゆるB2B営業



仙台城跡・伊達政宗公騎馬像
(宮城県仙台市)

の基本的な業務プロセスや案件管理手法の確認や営業施策の立案について支援をしている。

ジェイテックが保有する提供サービスは再処理施設に関係する技術が基盤になっているが、レーザーによるさびの剥離サービス、回転装置の故障予想にもつながる振動診断サービス、短時間でできる蓄電池容量診断サービ



ジェイテックでの執務（青森県六ヶ所村）

ス、ドローンでの点検サービス、排水管の液体を凍結させて工事を行うアイスプラグ施工サービス、配管の異常事象体感訓練装置など、一般企業のプラント施設でも使用可能なものが多く、技術の横展開では十分に適用できると考えられる。

ジェイテックにとっては一般市場への進出は始まったばかりだが、社員が体現している安全対策意識や品質の高い業務遂行能力は競争力の源泉になると思われる。会社の企業理念である「技術と人を、作る企業」が具現化できるように営業支援や経営支援で貢献できればと考えている。

経営支援ということでは、私は独立行政法人中小企業基盤整備機構 東北本部の中小企業アドバイザー業務の委託を受けて、中小企業の経営支援に携わっている。経営課題を相談された中小企業に対して、ハンズオンでの事業戦略や経営計画の策定支援、販路開拓等のマーケティング企画支援などを行っている。中小企業は独自で開発した優秀な製品があるのだが、肝心の売る施策が整理されていないケースが多い。現在支援をしている会社はデジタルサイネージのシステムの開発販売を行っているが、販売面で苦戦している。機能面ではよくできているが対象市場の絞り込みや販売施策を見直す必要があり、社長の意向を確認しながら事業戦略の再構築を検討している。

縁あってABICの会員になり、また、中小機構とも関係ができて地域企業の経営支援に携わるようになった。地域社会ではシニア世代が貢献できる分野が多くあると感じる。つたない経験だが、地域企業への関わりを通じて地域社会の発展に貢献できればと考えている。このようなご縁をつくっていただいたABICには改めて厚く感謝申し上げたい。

自治体・中小企業支援

滋賀県よろず支援拠点で企業海外進出をサポート

もり たけし
森 健 (元 コニカミノルタ、シャープ、SCREENラミナテック)

私は、長年勤めた大手メーカーの海外営業・海外商品企画・海外駐在の経験、また一般社団法人貿易アドバイザー協会認定貿易アドバイザーの資格が生かせる場と思い、2022年にABICに入会させていただき、その後、ABIC関西デスクのご紹介により滋賀県よろず支援拠点の海外進出コーディネーター職の機会を頂いた。

よろず支援拠点は各都道府県に設置された国の経営相談所で、中小企業・小規模事業者の売上拡大、経営改善など、経営上のあらゆる悩みの相談に無料で対応している。

2023年1月から勤務を開始した滋賀県よろず支援拠点は、大津市の琵琶湖南湖畔のなぎさ公園の前に位置する「コラボしが21」の2階、公益財団法人滋賀県産業支援プラザ内にある。「コラボしが21」は木々の向こうに琵琶湖を望むことができる風光明媚な場所に所在し、その環境は世界の基準から見てもピカイチと考える。

さて、私が担当する相談内容は、よろずよろしく多岐にわたる。例えば、相談各社の取扱商品は伝統工芸品、日本酒、食品、製造装置、工業材など多彩であり、また、商談の状況、対象市場、社内体制、ビジネス全般の経験もさまざまである。しかし、その中で唯一の共通点を挙げるならば、それは皆さんの海外進出に対する熱き思いであることは間違いない。

それに応えるべく、今私が実施しているのは、個々の来訪相談対応に加え、月1回のミニセミナー、不定期のセミナー、また各種関連団体との連携となる。

各種セミナーでこれまでにカバーしてきた主な題材例は以下になる：

海外ビジネス体制、使える外部組織、海外ビジネスの4P、各種規制・手続き、海外商談会・展示会成功のための準備と手順、海外販売契約と代理店契約、ビジネスメール、Chat GPT・Bing Chat・DeepL・Google翻訳の活用方法、等

海外進出の一言でカバーしている領域はあまりにも広くて深く、受講者全員がそれぞれ必要としている情報は決し

てセミナーの限られた時間内で網羅できるものではない。しかし、よろず支援拠点は、誰でも何でも安心して相談できることにその存在価値がある。そこで、セミナーの要素や構成、講演の順番に毎回工夫を凝らし、また回を重ねるごとに常連の受講者の実際の商談進捗状況に合った内容や、今注目されているテーマなども盛り込んでいる。

個別相談では個々の相談者の悩みに耳を傾け、必要としている具体的な情報、アドバイスを分かりやすく説明するように心掛けている。

なお、貿易の知識を得ていただくための参考資料の一つとして私が皆さんに紹介しているのは日本政策金融公庫発行の「輸出ノート」で、相談およびセミナーの初回の方にお渡ししている。これは日本政策金融公庫大津支店様のご厚意によりご提供いただいているものである。(注：「輸出ノート」は日本政策金融公庫のHPからダウンロードもできる)

相談、セミナー共に、皆さんが笑顔で帰っていただけるような情報を提供できた時の充実感は何ものにも代え難い。このような機会をご紹介いただいたABIC、またかくなる職をご提供いただいた滋賀県よろず支援拠点に感謝したい。

そして、今後も変わりゆく状況に合わせた情報提供を継続し、滋賀県商工観光労働部、各商工会議所、JETRO滋賀など、滋賀県の公的機関との連携をさらに深め、企業の海外進出の一層の推進に努めていきたい。



コラボしが21での貿易セミナー



コラボしが21



長浜商工会議所での貿易セミナー

教育

リスキングする人たちと共に研鑽する

くめかわ たけし
久米川 武士 (元 伊藤忠商事)

2年半前に長年勤めた会社を完全に退職し、その後すぐにABICを紹介され、登録した。会社人生の半分以上の年月を海外駐在勤務、また、国内本社勤務においても年2-3ヵ月相当は海外出張。その間の生涯フライト距離は、航空会社の記録によれば地球120周とか。この経験を、グローバルな社会貢献活動を旨とするABICの一員として、国内の海外進出希望企業、あるいは輸出入貿易を目指す企業への支援、逆に海外企業の国内市場進出支援、さらには外国人人材登用・労働者確保などに生かせるのではないかと、という思いがあった。

そんな矢先、京都の大学で大学院生を対象にした「国際ビジネス研究」をテーマとする講座の依頼を頂いた。人に物や事を教育する、あるいは指導するような人材ではないと思いつつも、今世界がさまざまな問題に直面している環境にある中で、自らの知識・経験を生かし、学生たちに「ビジネスのあるべき姿や課題」を考えてもらうために有用な情報を提供し、彼らと一緒に議論することができるのではと考え、お受けすることにした。

その講座は2023年も継続しているが、新たに園田学園女子大学のシニア専修コースというシニア向け講座の依頼を頂いた。この大学は、「社会連携部・生涯センター」という組織を通じて、昨今、頻度高く提唱されているリスキング、リカレントといった「学び直し」の重要性を早くから先取りし、長年シニア向けに学習の場を提供してきている。少子高齢化、生産年齢人口減少が際立つ日本社会において、ますます高まる「学び直し」の流れ。学ぶ姿勢を持とう、あるいは働く場に戻ろう、という意欲のあるシニアの人たちと共に、現状認識を踏まえて将来のあり得る姿

を想定し、それに備えて今からなすべきことや、次のジェネレーションに託すべきことを議論し、具体的な提言事項などを語り合える場を持てることは素晴らしい機会であるとの認識で取り組むことになった。テーマは、まさに「国際社会の諸問題」である。このテーマを米国、中国、中東、欧州の4地域に分け、私は駐在地で地域全体を見てきた経験から欧州を受け持った。

長い歴史的背景から強い倫理観で育まれた欧州社会からはさまざまな領域で学ぶべきことが多くある。現在の最大の問題、それは「ロシアのウクライナ侵攻」である。これを避けては通れない。この問題は欧州域内に限定されず、世界に政治・軍事、経済、社会、人権などさまざまな影響を与えている、いまだ進行形の耐え難い現実である。講座ではこの生々しい時事問題を欧州の生い立ち、為政者の歴史観、民族・言語などの文化、東西欧州の繰返し起こるあつれきから生まれた複雑でデリケートな国家の枠組みなど、さまざまな視点で分析・研究を行った。さらには、グローバルサウスの登場を含め、この侵攻が現在世界の社会体制の構図に大きな変化を与えようとしていることも議論の一部になった。そんな中で欧州は変わらざるを得ない。であれば、どのように、また、どこに向かうのか。そんな緊迫、緊張した講義、議論の連続でもあった。

現役の学生とはまた違う、自らに近い同世代の、かつ学ぶ姿勢を真摯に持つシニアの人たちとの勉強会。この大学の社会連携・生涯学習に対する強い思いを受けたこの講座が、参加された方々の知識・情報を深め、学ぶ意欲をさらに高めることに寄与できたならうれしい限りである。また、この機会を与えてくれたABICに心より感謝したいと思う。



講義風景

教 育

幼稚園児向け国際理解教室

はた さとし
秦 智 (元三菱商事)

2023年5月、幼稚園児向け国際理解教室の話がABICから飛び込んできた。園児にインドを紹介する企画だという。日本語教師を第二の人生として以来、インドの大学をはじめ学校で教えたり、日本の学生や社会人にインドの話をしたりする機会はあった。在印日本人補習校や、在京のインド人学校で児童を教えたこともある。しかし、園児を相手にしたことはかつてない。園児にインドを紹介といわれても、まさに五里霧中。ただ、幼稚園での国際理解教室という意欲的な企画に惹かれ、挑戦してみることにした次第である。

いろいろ考えた末、世界にはいろいろな国があり、インドの中にもそれぞれ独特の文化や習慣を持って生活しているさまざまな人々がいる、まずはそういうことを知ってもらうことにした。園児ということもあり、画像や活動を盛り込むことも念頭に置いてプログラムを練った。

実施日の1ヵ月ほど前、ABICのコーディネーターの宮内雄史氏と共に東京都中央区の幼稚園を訪れ、担当の先生と打ち合わせた。それに基づき、年少組（3歳児、32名）、年中・年長組（4・5歳児、60名）の二つのグループに分け、インドの紹介とダンスやヨーガを盛り込んだプログラム（年少組20分間、年中・年長組30分間）を作成し、再度幼稚園を訪れて打ち合わせた。そこで、「ナマステ」というあいさつの説明に「南無阿弥陀仏」を引き合いに出すのは特定の宗教に偏るので好ましくない、人口や面積などを数字で説明しても園児には響かないなど、現場の先生なればこそその貴重なアドバイスを頂き、とても参考になった。

6月23日の当日、園児が興味を持ち、反応してくれるかどうか心配だったが、杞憂^{きゆう}であった。インド服を着てスネーク・ダンスの音楽に合わせて登場し、両手を合わせて園児に「ナマステ」と唱えながら回ると、初めはげげんそうに

していたが、すぐにあいさつだと気付いてくれた。インドのさまざまな民族、カレー料理、動物などをクイズ形式で紹介した後、結婚式でよく踊られる激しくにぎやかなバングラ・ダンスと一緒に踊った。園児たちはもちろん、先生方や園長先生まで楽しそうに踊ってくださったのに励まされ、息切れしながらも何とか踊り切れた。最後は、ヨーガでリラックスした。年長組の園児だけ残って質疑応答があった。「どんな車が走っているの?」「電車はどんなふう?」など、矢継ぎ早の質問攻めに遭い、園児の関心の高さと、活発さに驚かされた。

インドで暮らしていた時、インドの子供たちの目が輝いているのをうらやましく思ったものだが、なかなかどうして、日本の園児たちの目も負けず劣らずキラキラしているのが印象的だった。この園児たちが大人になる頃には、日本の国際化もさらに進んでいるはずだと感じた。日頃は接する機会のない元気な園児たちと一緒に時間を過ごし、とても刺激を受けた。貴重な体験をさせていただいたことに感謝している。

「ナマステ」で始まった国際理解教室は、「ナマステ」で終わった。「おはよう」や「こんにちは」にもなり、「さようなら」にもなる便利なあいさつである。後日、幼稚園の先生から、園児たちが「ナマステ」とあいさつし合っているのを見かけるというメールを頂いた。「国際理解」というと物々しいが、まずは、世界ではさまざまな人々が自分たちとは違う言葉を話し、それぞれ異なった生活をしていることを知り、違いを知った上で共有できる点も探りつつ、お互いに理解しようとするのが出発点ではないだろうか。園児たちが、どこかで出会ったインド人に「ナマステ」と声を掛け、それがお互いに理解し合うきっかけになることを期待する次第である。



「バングラ・ダンス」を踊ってインドを体験する



クイズでインドを知る

教 育

ABICと共に歩んだ9年半

みやうち まさよし
宮内 正敬 (元 丸紅)

私は、9年半にわたりABICと共に歩んできた。2014年6月からABICの講師として各大学に派遣され（現在も継続中）、2021年10月から2023年6月まではABICのコーディネーターとして、会員の皆さまを各大学に講師として派遣する業務にも携わった。以下では、講師としての歩みとコーディネーターとしての業務を振り返ってみたい。

講師としての歩み

2014年6月から現在に至るまで、四つの大学、一つの大学院で講師として主に総合商社の事業経営やスーパー・コンビニ業界などについて講義を行ってきた。最初に派遣された大学をはじめ、三つの大学では5年以上講師を務めさせていただいた。また、2021年12月からは初めて大学院での講義も行った。各大学での講義で印象に残ったこと、大学ごとの特色などを振り返ってみたい。

最初に派遣された大学では、講座の対象学部は経済学部だった。毎回、講義の始まる前に担当教授が出欠を取り、教授自身は出欠を取り終わったら退出された。講義内容は全てお任せいただいたということであったが、講義出席の学生数は少なく（毎回10人程度）、やや寂しい感じもした。ある日の講義の最中に、一人の学生が退出したが、たまたま同大学に勤務していて講義を聞きにきてくれていた中高時代の友人が、その学生を追いかけて「講義の途中退出は講師に対して失礼だ」と言ってくれたのが懐かしい思い出だ。初めて派遣された大学であり、よく5年間も続いたなというのが正直な感想だ。

次に派遣されたのは関西の大学であった。毎回、関西に出張して講義を行い、1泊して帰宅した。関西には友人が多いので、講義後の時間も旧交を温め、知見を広めるなど大変有意義な出張であった。担当の教授も商社出身なので、ABICの講師（商社出身が多い）の話題や講義の進め方などに理解があり、講義内容やABICの活動についても良く知っていたので、担当教授・講師共にやりやすかったと思われる。

2016年から2017年にかけて1年間講師を務めた大学では、講師2人で講義を受け持ったが、約120人の学生は男女ほぼ同数で、他大学に比べて女子学生が目立っていたことが印象的であった。



2018年から担当した大学では、学生数は150人前後の大講義だった。大学校舎が広いせいもあるかもしれないが、毎回スクールバスの到着時刻に担当教授に出迎えていただき恐縮した。この大学は真面目な学生が多く、講義後（2～3日後）に頂く学生からの意見や質問は全30ページ近くもあり、通読して質問への回答を用意するにはかなりの時間と労力が必要であった。それでも、学生からの意見などを見ると、こちらの気が付かない点もあり、有意義なシステムだと思っている。

2021年からは大学院生向けの講義も行った。初年度は学生数（聴講生）が3人であったので、これまでの講義と比較して何か物足りない気がしたが、大学院生が1人、残りの2人はいわゆる社会人学生で、他大学と比較すると、講義中の熱意が大分違っていただ思う。2023年からは聴講生が7人となり、私の講義は12月9日、12月16日に予定されており、楽しみにしている。

コーディネーターとしての業務

ABICからの要請を受けて、2021年10月からABICのコーディネーターを務めさせていただいた。自己都合で1年9ヵ月間となってしまったが、さまざまな大学から新講座への講師の派遣や、引退する講師の後任講師の派遣を要請され、これまでの講師の経験も生かし、多くの講師を推薦し、大学側から承認をいただいた。中には非常勤講師から常勤講師に採用された方もいて戸惑ったりもしたが、良い思い出、良い経験であった。

教 育

高校生国際交流の集い2023

関西デスクコーディネーター ^{たちばな ひろし} 橘 弘志 (元 三井物産)

8月3-4日、真夏の太陽が照り付ける関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスに、今回で17回目となる「高校生国際交流の集い」に参加する高校生と留学生が集まった。2022年は1日目はオンライン開催だったが、コロナ禍を経て、2023年は2019年以来の全日程対面形式での開催に戻ってきた。

このイベントは、関西学院大学研究推進社会連携機構のスタッフと同大学の学生組織KGIH (Kwansei Gakuin Global Inspiration with Highschool) のスタッフが年頃から関係者と緊密な連携を取りつつ準備してきたものである。今回は大阪府立千里高等学校、大阪府立箕面高等学校、兵庫県立国際高等学校、兵庫県立兵庫高等学校、神戸市立葺合高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部、啓明学院高等学校、帝塚山学院高等学校の9校から計30人の高校生が参加した。留学生は、米国、コスタリカ、パナマ、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ドイツ、ハンガリー、フィンランド、タイ、ニュージーランドの11カ国から計14人が参加し、参加者総数は計44人となった。

「Be a Changemaker ～課題に気づき、未来を築く～」というイベントスローガンの下、関西学院大学副学長・研究推進社会連携機構長の土井教授による開会スピーチでイベントが始まった。最初に、現在米国で研究生活をされている関西学院大学出身の金美穂先生が、サンフランシスコからオンラインでゲストスピーカーとして登壇し、アントレプレナーシップについて分かりやすく講演された。金先生は、この場に集った生徒たちに向けて、アントレプレナーの気持ちになって積極的にディスカッションに参加してほしいとエールを送られた。続いて、学生スタッフによる自

己紹介と丁寧なオリエンテーションが行われた。

昼食後、程よく温度管理された体育館で、生徒たちはゲームを通じて互いに打ち解けあった。その後、七つのグループに分かれ、グループごとに決められたSDGsに関連する諸課題を解決するためのビジネスモデルについて、生徒たちの間でディスカッションが始まった。KGIHのスタッフは生徒たちと積極的にコミュニケーションを取り、ディスカッションの進行を支援した。夕食後は、関西学院大学の宿泊施設に移動し、国際交流を続けた。

2日目も、生徒たちはパワーポイントを駆使して資料を作成するなど互いに協力しながらグループディスカッションを続けた。そして夕刻、少し緊張した面持ちで最終プログラムのプレゼンテーションに臨んだ。

プレゼンテーションでは、ABICからも岩田事務局長、板倉コーディネーター、私の3人も審査員として参加し、全力で評価に臨んだ。閉会式では、岩田事務局長によるスピーチの後、審査結果が発表され、上位入賞グループに岩田事務局長より表彰状と賞品が授与された。次いで、関西学院大学研究推進社会連携機構副機構長・社会連携センター長の片山教授より参加者全員に修了証が授与された。

KGIHのスタッフの中には、高校生の時にこのイベントに参加した経験のあるメンバーも多い。今回は初めての海外からのオンラインでのゲストスピーチ、また、プレゼンテーションの審査方法の見直しなど、さまざまな工夫が見られた。これからもこの国際交流イベントが参加者を含め関係者にとってより良い集いへと発展していけるよう、ABICとしても全面的に協力していきたい。



参加者全員で



プレゼンテーション風景

留学生支援

囲碁を楽しもう

はま だ もと お
浜田 元雄 (元 三菱商事)

世の中、将棋好きの世界のみならず、ルールさえも知らない一般人の間でもスーパーヒーロー藤井聡太八冠一色である。

しかし、囲碁の世界も、棋士の多彩さでは負けていない。近代で一番強かった、と個人的に思っている藤沢秀行さんは破天荒な生活ぶりだった。酒は飲むわ、ばくちで大借金はするわで、その上、口も悪かったが、本当に囲碁に一生をささげた方だった。

現時点で囲碁界最多のタイトル獲得数76個を持つ趙治勲^{チョウチ}さんは、かつて、あるタイトル戦直前に車にはねられ全治3カ月の大けがを負った際、医者から「麻酔が脳に全く影響を及ぼさないと保証できない」と言われ、麻酔なしで手術したという「うわさ」もあるくらい、囲碁命の方だ。

井山裕太さんは、2016年、2017年と全七冠制覇を合計2回達成し、2018年に国民栄誉賞を受けた。藤井聡太さんほど脚光を浴びなかったのはなぜだろう？

2019年には10歳の仲邑^{なかむら すみれ}童さんが特例でプロになった。他にも例を挙げればキリがない。

1960年に始まった「日中交流戦」は、最初のうちはずっと日本が先生格だったが、残念ながら、1990年ごろから日本は中国に勝てなくなってしまった。

ゲームの世界は、今やAIの話題を避けては通れない。コンピューターがチェスの世界チャンピオン、カスパロフに勝ったのが1997年。

将棋はチェスと違って、取った駒を再使用できるという複雑さがあるので、向こう30年はコンピューターも人

間には勝てないだろうという意見が多かったが、AIの登場が予想を変えた。2017年に佐藤天彦名人（当時）が敗れ、AI優位が確立された。

囲碁の場合は黒石と白石のみという無機質な石を置き合う捉え所のないゲームなので、コンピューターが人間に勝つのは将棋よりさらに10～20年後だろうと思われていた。しかし、2016年に当時世界最強のイ・セドルさんとAI（アルファ碁）の5番勝負が行われ、4勝1敗でAIが勝つという衝撃的な結果となった。

その後「AI定石」なども出現し、盛んに採用されている。AIの場合、思考過程が分からないので、そこは人間が考えるしかない。現在では囲碁界も将棋界もAIの打ち方を参考にしながら、「人間」対「人間」の勝負が行われている。

さて、私は2022年の9月から東京国際交流館に居住している留学生とその家族を対象にABICの囲碁教室を担当している。ゴルフ友達のABIC会員から頼まれ、かつABICには過去いろいろとお世話になってきたので、引き受けることとし、一年がたった。囲碁教室は約20年前に始まったそうだが、これまで講師の方は2人のみということで、長年のご指導に敬意を表したい。

これまで、中国、韓国、タイ、マレーシア、スリランカ、メキシコ、エクアドルなどから来日した留学生が受講しにやってきた。留学生だから当然だが、短期間の人が多い。教室は月に1回、2時間のみのなので、飛躍的に腕が上達することは望めない。せめて、囲碁とは陣地取り合戦の遊びであることや、囲んだ陣地が他人の陣地か自分の陣地かの判別の方法や最後の勝負判定の方法などについて、分かってもらえればなあという気持ちで教えている。従って、細かい「定石」とか「手筋」とか「形」とかは最小限にしている。ただし、基礎は重要なので最初に基本問題を40～50分、その後実践を行っている。実践を行うときは、通常の19路盤ではなく、13路盤にしている。この方が一勝負が早く終了するので、何度もできる利点がある。

自分自身、いろいろな時期に1～2年ずつ飛び飛びにやってきたので、楽しむ程度の実力になってしまっているが、留学生には、とにかくルールと大体の概念をつかんでもらい、初心者は初心者なりに、初・中級レベルの人それぞれレベルに合わせて、囲碁を楽しんでももらえればと思っている。



囲碁教室風景

留学生支援

東京国際交流館での活動

留学生支援担当コーディネーター **やまだ たかし** **山田 隆** (元 丸紅)

文科省傘下の独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が運営する東京国際交流館（TIEC）には、現在、単身者用612室、家族帯同者用164室、合計776室に約1,000人が居住している。ABICはTIECにおいて日本語広場、日本文化教室（茶道、華道、書道、空手、囲碁、将棋）、春・秋のバザー、国際交流フェスティバルでの日本文化体験教室、さらにはTIEC居住者の育児健診通訳など、さまざまな支援を行っている。

日本語広場

広場では日曜日を除き対面およびオンラインで日本語教室を開いており、23人の講師が日本語指導に当たっている。3～5月、8～10月に居住者の大半が入れ替わるので、2022年からその時期に合わせて、日本語広場・日本文化教室の紹介、オンライン授業の募集等のメールをJASSO経由で新入居者に一斉に出している。その当初は参加者が多いが、徐々に減っていくのが課題である。ここ数年、各大学は日本語初心者に対し「生活の日本語」を教える講座を学内に開設しており、ほとんどのTIEC居住者が利用している。それが多分に影響して日本語広場の初級1、初級2クラスへの参加者が少なくなっているのではないかと考え、その二つのクラスへの参加者を増やすために、四つの対策を講じることにした。1) JASSOが新入居者に入居案内を出す際に、日本語広場・日本文化教室の紹介、オンライン授業の募集等を添付してもらい、新入居者に確実に届くようにした。2) 居住者へのアンケートを基に10月から水曜日に限り試験的に授業開始時間を従来の10時30分から18時に変更し、今後の推移を注視することにした。3)

10月から対面の初級1クラスで教材として国際交流基金がウェブ上で公開している「いろどり入門」を使用し、指導内容に一貫性を持たせるようにした。4) 10月からオンライン授業を再編し、オンラインでは難しいとされてきた初級1を新たに3クラス設け、初級2を3クラスから1クラスに、中級を3クラスから2クラスに変更した。この四つの対策で日本語広場への参加者増を期待したい。



日本語広場

国際交流フェスティバルでの日本文化体験教室

10月28日の国際交流フェスティバルで華道、書道、空手の体験教室をそれぞれの開始時間をずらして開催した。全体で延べ約70人が来場し、1日で複数の日本文化に触れ

ることができたと好評であった。今回は居住者の参加が多く、毎月1回開催している各文化教室への参加者増につなげることを期待したい。



華道体験教室



書道体験教室



空手体験教室

留学生支援バザー

春のバザーは5月に開催し盛況であった。秋のバザーは11月11～12日に開催予定。毎回、ABIC活動会員および法人会員各社に多くの物品を寄贈いただいております、ご協力

いただいた皆さまに心からお礼申し上げますとともに、今後ともご支援・ご協力いただきますようお願い申し上げます。

留学生支援

兵庫国際交流会館での活動

関西デスクコーディネーター **鹿志村 馨** (元 住金物産)

日本語広場

2015年5月から開始したABIC日本語広場は、2018年度に受講者数は延べ2,126人と過去最高を記録した。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大で1,067人と半減したが、2021年度は1,562人とやや持ち直し、コロナの規制が全面的に解除された2022年度は1,817人まで回復している。2023年度は前年を超える受講者数が見込まれる。

2023年度下期は前年より多くの学生が入館した。アフリカからの学生が多く、次いで中東、南アジア、南米からで、中国、韓国、台湾などからは以前より少なかった。アフリカ、中東からの学生は初級クラスを受講するのが一般的であり、受講者数は着実に増えている。また、出身国・地域を問わず、退館後もさらに日本語を学ぶため受講を継続するケースや、友人を誘って受講するケースも少なからず見受けられる。日本での就職を目指し、そのために日本語能力試験でN2を取得すべく熱心に受講する学生が増えている。N2取得済みの上級の学生にも、就職に役立つ講義内容になっており、この傾向は今後も継続すると思われる。

日本文化教室

2022年度より対面授業になりクラスに活気が戻っている。人気のある華道は、修了証の取得に向け熱心に参加する学生が多い。受講者は中国、台湾、米国、英国、そしてコートジボワール、ベニンなどアフリカからの学生も参加している。すでに華道の極意を理解している受講者も多く、



日本語広場



書道教室

自分の仕上げた作品について自信を持って説明する者が出ている。

空手は、アフリカ出身の兵庫国際交流会館（HIH）のOBは相変わらず熱心に参加し、講師の指揮下、積極的に後輩の指導に当たっている。常連が多い中、前期は女子学生が参加し華やいだ雰囲気になっていたが、その女子学生たちが卒業したため新たな参加者が待たれる。

書道は、熱心なタイと中国からの学生数人だったが、このところ非漢字圏のベニン、エジプト、ベトナム、インドネシアからの学生が熱心に参加している。彼・彼女らは、日本語広場では漢字に苦労しているが、書道で漢字に接することで苦手意識を払拭してもらいたい。

秋期新入館生ウエルカムパーティー

2023年10月、コロナで中止していたウエルカムパーティーが4年ぶりに開催された。冒頭、吉野館長から「HIHには51ヵ国170人の留学生が居住している。お互いにそれぞれの国の文化を理解し有意義な生活を送ってほしい」とのあいさつがあり、続いて在館生、新入館生の代表のあいさつ、RA^(※)の紹介などがあった。その後、和太鼓の演奏が披露され、会場は大いににぎわった。今回、来賓としてABICのほか、神戸大学、関西学院大学、関西国際大学など留学生を受け入れている大学の関係者、大学コンソーシアムひょうご神戸、兵庫県国際交流協会、各種NPO法人の関係者が招待された。ABICからは岩田事務局長も参加し、ABICの日本語講師10人および関西デスクのコーディネーターとも歓談した。会場では、ABICのチラシと登録票を新入館生に手交して日本語広場・日本文化教室への勧誘を行った。

ところで、ABICのもう一つの留学生支援活動であるバザーは、2022年度は中止していたが、2023年度は5月に続き11月も実施の予定である。

(※) RA (Resident Assistant) : HIHに居住し、同館に入居する外国人留学生などの日常生活や勉学上のサポートなどを行う日本人大学院生。



新入館生ウエルカムパーティー

日本語教育

紙芝居による日本語教育 ―世界に誇れるKamishibai―

スリー・エイチ日本語学校、千葉市国際交流協会 日本語教師 かたおか ゆりこ 片岡 由里子

2023年の年明けにABICから案内を受け、5月から気仙沼市が運営する日本語教室での日本語指導に携わり始めた。

日本語教室にはJLPT（日本語能力試験）に合格したいという主にインドネシア、ミャンマーからの技能実習生が多数参加しているが、7月の試験が終わり一段落したタイミングで、日本文化体験として「紙芝居授業」をやらせていただけることとなった。

「日本語教室で紙芝居？ 余興として？ レクリエーションの一つ？」と思われる方も多いと思うが、さにあらず。私は紙芝居を「日本語教育に非常に適した教材」として2013年から授業に取り入れている。

日本が誇る伝統文化「紙芝居」

紙芝居は、日本では誰もが見たことのあるありふれたものだが、実はこの1枚1枚バラバラの形式は日本にしかない。世界中に絵本はあっても紙芝居はないのである。始まりは1930年前後で、100年近くの歴史を持ち、そのユニークさから世界でも「Kamishibai」と呼ばれている。このような点から、紙芝居を日本の伝統文化として紹介する使い方もできるが、それだけではもったいない。なぜなら紙芝居には語学教育に適した特性が備わっているからである。

紙芝居は聴解教材になる

紙芝居は文字が裏にあるので、学習者は演者の日本語を絵に集中しながら聞くこととなる。やや長く語彙が難しいものが入っていても、絵がありストーリーの起承転結がはっきりしている紙芝居は、見ていて、聞いていて、とても楽しく、非常に集中する。一緒に見る仲間たちと、母語ではない言葉でストーリーを理解できる喜び、共感する体験はとても貴重で、CDをかけて聞く聴解教材にはない魅力がある。そのため紙芝居はとても良い聴解教材になる。日本語教室の初級の学習者も、時には隣の人とストーリーを確認しながら、時には声を出して笑いながら、目をキラキラさせて見ていた。

紙芝居は発話・発音教材になる

紙芝居は芝居であり、セリフで進む脚本はエンターテインメント性がある。紙芝居を紙芝居舞台と呼ばれる木枠で作られたものに入れて演じると、一瞬で場の空気が変わる。観客は何が始まるのか？ どういう仕組みになっているのか？ と興味津々。どこの国の人も一度見ると、「自分でもできるかも。やってみたい！」という気持ちになる。そうして実際にやってみようと（ここが一番のポイントなのだが）、皆自然と「観客に分かってもらえるように話さなければならない」「紙芝居はお芝居なのだ」と理解し、おのずと役になりきって発話するのである。普段教科書をボソボソと音読している人でも、



日本語教室の様子

紙芝居だと声を変え感情を込めて驚くほどうまく発話する。

今回の気仙沼市でもそうであった。私が演じた後、数人を指名して脚本を読んでもらい、数分後に演じてもらったが、誰もが驚くほど感情を込めてやってくれ、仲間たちからはやんやんやの大絶賛！ 笑顔がはじけ、教室内が一つになったのがわかった。

紙芝居で多文化理解ができる

今回私は、インドネシア、ミャンマーのお話を日本語学校の留学生たちと紙芝居化したものを持参し演じた。気仙沼市の学習者も母国のお話が始まると「えっ？」とびっくりし、その後笑顔に変わっていった。紙芝居に描かれる絵は国によって変わる。例えば登場人物の髪型、服の形、色使い、出てくる動物、植物なども違う。そのためそれらを鑑賞することは、それ自体が異文化の理解につながる。これまでの実践でも紙芝居を見た後にさまざまな質問や感想が出てお互いの国への理解が進んだ。

今回は1時間という短い時間だったのでディスカッションまではできなかったが、学習者たちの普段と違う姿、満面の笑顔を見ることができ、気仙沼市の職員の皆さんにも喜んでもらえて、本当に良い時間になったと感じている。

今後も、日本語教師として紙芝居を適宜利用しながら、ABICで日本語を学習している皆さんに貢献していけたらと思う。



紙芝居に挑戦する学習者たち

新入会員のお知らせ

賛助会員（団体） 2023年10月入会 公益社団法人東京のあすを創る協会

会員の種類

種類	内容	年会費
正 会 員	センターの趣旨に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。（理事会の承認を得て入会）	法人および団体 1口 50,000円
		個人 1口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、ならびに個人、法人および団体。	法人および団体 1口 10,000円
		個人 1口 5,000円
活動会員	センターの趣旨に賛同し、事業に参加しようとする個人。	不要 — —

（2023年10月末現在）

正 会 員

法人・団体（16社、1団体）〈社名五十音順〉

- 〈10口〉 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株) (一社)日本貿易会
 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 日鉄物産(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（11名）〈敬称略・氏名五十音順〉

- 〈3口〉 中村邦晴
 〈1口〉 池上久雄 市村泰男 岩城宏斗司 岡 素之 小林栄三 小林 健 佐々木幹夫
 寺島実郎 宮原賢次 吉田靖男

賛 助 会 員

法人・団体（3社、1団体）〈社名五十音順〉

- 〈2口〉 (公社) 東京のあすを創る協会
 〈1口〉 (有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ 三谷ビジネスパートナーズ(株)

個人（191名）〈敬称略・氏名五十音順〉

下記は2023年6月以降にご入会いただいた方々です。

- 〈2口〉 井川哲宏 内藤 幹 〈1口〉 板倉直人 菅納ひろむ 鳥山重遠 山根 学

活 動 会 員 3,010名

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、
 ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1 霞が関コモンゲート西館20階

TEL：03-6268-8604 FAX：03-6268-8652 E-mail：mail@abic.or.jp